
学 会 記 事

平成 28 年度新潟精神医学会

日 時 平成 28 年 10 月 22 日 (土)
午後 2 時 50 分～午後 6 時
会 場 新潟グランドホテル

I. 一 般 演 題**1 ベンゾジアゼピンとアルコールの長期不適切
使用が原因と考えられた若年性認知症の 1 例**

橋尻 洸陽・横山 裕一・福井 直樹
鈴木雄太郎・染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院 精神科

【背景】ベンゾジアゼピン (BZD) やアルコール使用によって一過性の健忘や記憶障害が起こることは知られているが、認知症発症リスクを上昇させるか否かについての報告は一定していない。BZD を長期間大量内服しながら飲酒を続け、持続的な認知機能低下をきたした若年性認知症を経験したので報告する。

【症例】49 歳、男性。20 歳代から大酒家であった。X-14 年 (35 歳) に後頭部から頸部にかけての不快感が出現し、近医でエチゾラムとアルプラゾラムを開始された。その際、禁酒指導されるも飲酒を継続した。

X-10 年 (39 歳) 頃から注意力・集中力低下、不安、情動不安定性が出現し、エチゾラム 3.5mg/日・アルプラゾラム 2.8mg/日を常用するようになった。X-3 年 (46 歳) 頃から、仕事 (営業) でミスが増え、A 心療内科を受診した。認知機能検査は正常であり、同剤を継続された。ビール・ハイボール 3 杯/日の飲酒も続けた。X-1 年 12 月 (48 歳) に言ったことをすぐ忘れ、的外れな応答が目立ち、スケジュール管理ができなくなっ

た。仕事をこなせなくなり、クレームを受けることが多くなった。X 年 5 月 (49 歳) に長谷川式認知症スケール (HDS-R) 25/30 点と減点を認めたため、認知症を疑われ当科を紹介初診し精査加療目的に入院した。BZD 薬とアルコールの長期不適切使用による認知機能低下を疑われ、エチゾラムとアルプラゾラムを順次漸減中止した。薬剤中止後の認知機能検査では、部分的な改善はみられたが、視空間認知機能を主体とした認知機能障害は残存し、診察上も思考の緩慢さは遷延した。退院後も認知機能障害は持続し復職は困難であったため、抗不安薬誘発性認知症と診断した。BZD による認知機能障害は薬剤中止後 6 か月以上持続するという報告もあるため、今後更なる改善がみられる可能性もある。背景として前頭側頭型認知症や若年性アルツハイマー病などの変性疾患の存在も否定できないため、慎重な経過観察が行われている。

【倫理的配慮】患者と家族から発表に関する同意を文章と口頭で得たうえで、個人が同定されないように配慮した。

【結語】15 年間の高用量 BZD とアルコール使用により、若年性認知症にいたった症例を経験した。BZD 薬は短期間使用が望ましいのは当然であるが、それに加えて禁酒支持の徹底や併用薬への配慮、こまめな認知機能評価の継続が必要であることを肝に銘じた症例であった。BZD 薬が認知機能低下を引き起こす病態メカニズムにおいてははまだ解明されておらず、今後の研究に期待されるところである。